

## 4 竈窯焼成円筒埴輪生産の地域的様相

— 八代海沿岸地域の事例 —

竹中 克繁

## はじめに

埴輪は、古墳時代において通時的に用いられた墳丘表飾物であり、川西宏幸氏による円筒埴輪編年の確立（川西1978）以降、古墳研究における有用な時間軸として用いられている。しかし本稿で対象とする熊本県南部の八代海沿岸地域には、普遍的な編年の適用し難い、個々の古墳に特徴的な埴輪が多く、時間的な位置付けがやや曖昧である。

埴輪の時間的変遷を考える上で、地域的なまとまりの中でその検討を行うことが最も有効なのは、川西宏幸氏によって作成された所謂「川西編年」が、発表後30年以上経った今日においてもなお、第一線の埴輪編年として機能していることから明らかである。更には、その検討対象を特定の古墳群に限り、その中で変遷を追うことができれば、それは最小単位の地域的なまとまりであり、その時間的位置付けは、最も蓋然性の高いものになりうると思われる。熊本県地域では、県北の清原古墳群と、県南の野津古墳群を主軸に据えることで、須恵器TK208型式段階からMT85型式段階までの、詳細な埴輪の変遷を追うことが可能である。更には、これらの古墳群の埴輪との比較、検討により、熊本県地域の埴輪は、詳細な時間的位置付けを得られる可能性がある。本稿では、県南の八代海沿岸地域を対象として、竈窯焼成導入後の、個々に特徴的な埴輪の詳細な時間的位置付けを試み、当該地域における埴輪生産の一端を描き出してみたい。

## 1 竈窯焼成導入・展開期の埴輪

八代海沿岸地域における竈窯焼成導入、展開期の埴輪は琵琶塚古墳、松橋大塚古墳、道免古墳、カミノハナ1号墳があり、他に古墳出土以外の資料として石ノ瀬遺跡、轟貝塚がある。うち、川西編年の様相に合致する、即ち普遍的様相を持った埴輪はIV期に該当する石ノ瀬遺跡のみで、他はいずれも独自性が強く、川西編年や畿内共通編年（小浜2003等）に当てはめることは困難である。特に琵琶塚古墳は埴輪そのものの位置付けも研究者によって大きく異なり（竹田2000、竹中2003a、杉井2006a、加藤2008）、当該期の県南地域の様相が複雑であることを示している。しかし、目を転じて県北地域を見ると、菊池川流域の清原古墳群では、古墳時代中期から後期初頭にかけて、古墳群内での継続的な埴輪生



図1 八代海沿岸地域の竈窯焼成埴輪分布図

産が行われている。清原古墳群では埴輪以外の要素からの詳細な時間的位置付けも行われており、この清原古墳群の埴輪との比較、検討により、当該期の八代海沿岸地域でも、埴輪の詳細な時間的位置付けを行いうる可能性がある。そこで、まずは清原古墳群の様相を確認した上で、比較、検討を行いたい。

### （1）清原古墳群の埴輪

墳長62mの前方後円墳である江田船山古墳は、主体部である横口式家形石棺より「ワカタケル大王」銘の鉄刀をはじめ、金銅製装身具や鏡、武器、武具、馬具等、豊富な副葬品が出土し、また須恵器、埴輪を有することから、九州における古墳編年の定点の一つと成すべく、その時間的位置付けが、ここ数年来、議論の俎上に上がってきた（九州前方後円墳研究会2007・2008）。結果として、2相に分類される内容物の第1段階、すなわち初葬段階を須恵器TK23型式期、集成編年8期前半に位置付けることに、各研究者の一致を見たようである（木村2007a・2007b、桃崎2007、橋本2007、藤本2008）。清原古墳群には、この江田船山古墳の前後に虚空蔵塚古墳、京塚古墳、塚坊主古墳があり、特に墳長44.3mの前方後円墳である塚坊主古墳は、装飾を持つ横穴式石室を含めた調査が行われており、周溝出土須恵器や馬具、石屋形を持つ複室の石室構造より、須恵器TK47型式並行段階に位置付けられている（木村2007a・2008、桃崎2008、宮元2008、藤本2008）。虚空蔵塚古墳、京塚古墳では前2者ほどの詳細は不明であるが、ともに周溝出土須恵器があり、虚空蔵塚古墳はTK208～23型式、京塚古墳はTK23～47型式とされている（木村2007a）。

江田船山古墳の埴輪は、総じて器壁は薄手で、普通円筒は底部から口縁部にかけて直線的に、ほぼ垂直、ないしやや外傾しながら立ち上がる。完形の朝顔形円筒では胴部4段構成になっており、円形の透かし孔が底部直上段と肩部直下段、すなわち2段目と5段目に、軸を直交にして配置される。普通円筒は破片のみで、全形を復元できるものはないが、朝顔形の段構成より、4条5段構成と思われる。透かし孔については、底部直上段と口縁部直下段に透かし孔が確認でき、また透かし孔を有さない段が設けられていることが窺えるため、2段目と4段目の隔段配置と考えられる。突帯は幅広で突出度もあるが、断面M字状になるものが多い。胴部高は10～11cmで斉一性が高いが、口縁部高は14cm前後のものとは18cm前後のものがあり、胴部各段よりも著しく高い。外面調整は目の細かい原体による

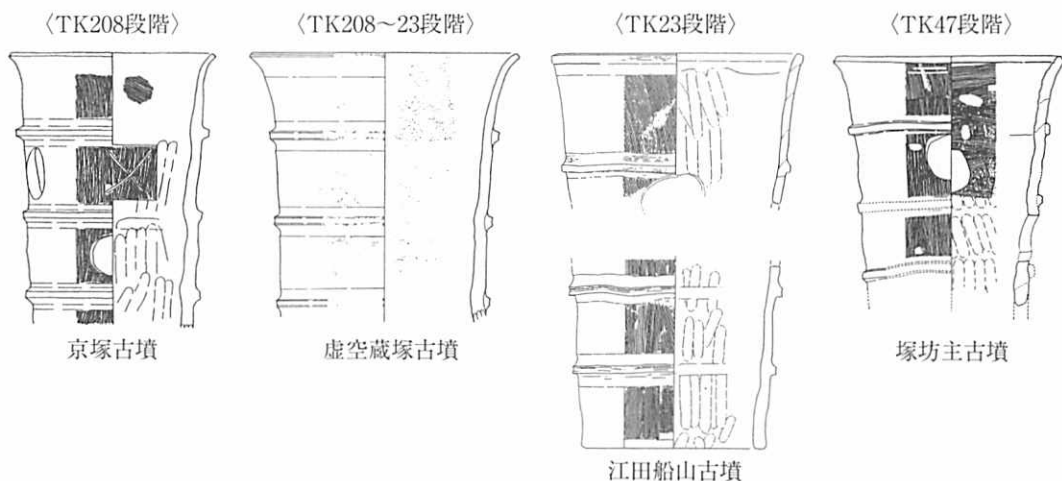


図2 清原古墳群の埴輪 (Scale : 1 / 10)

斜位の1次調整タテハケを基調とするが、わずかながらB d種ヨコハケを施したのも見受けられる。他に、普通円筒口縁部および朝顔形円筒肩部の外面に線刻が認められるものや、器壁とは異なる色調の、白色粘土による突帯が認められる資料がある。当墳の埴輪と須恵器型式との並行関係については、かつて筆者はTK73~47型式段階の後半に位置付け（竹中2003b）、近年では井上義也氏が、さらに詳細に、須恵器TK23~47型式段階に並行する、氏の編年におけるVa段階に位置付けており（井上2007）、前述のTK23型式段階とする他の要素からの当墳の位置付けと齟齬はない。そこで、当墳の埴輪を須恵器TK23型式並行段階の基準資料として扱う。

江田船山古墳に続くTK47型式段階に位置付けられている塚坊主古墳の埴輪は、完形に復元された普通円筒が2個体あり、ともに4条5段構成で透かし孔は段違い直交に配置されている。器厚は厚手で、底部からほぼ垂直に立ち上がり、口縁部において外反するものと、底部から口縁部にかけて直線的に、やや外傾しながら立ち上がるものが存在するようである。突帯はやや細身で、突出度があるが、断面M字状になるものが多い。突帯の貼り付けは歪みが大きい、爪で突帯貼り付け位置に印を付けたと思しき資料もある。また特筆すべき特徴として、最下段突帯における押圧技法の施工が認められる個体が存在する。外面調整は1次調整タテハケであるが、不定方向で斜位になる断続的なものが多い。江田船山古墳からの時間的変移として、器壁の肥厚化や、押圧技法や突帯貼り付けの歪みなどの簡略化・粗雑化、ヨコハケの消滅、調整の粗雑化などが認められる。

江田船山古墳に先行するTK208~23型式段階に位置付けられている虚空蔵塚古墳の埴輪は、器壁は薄手で、底部から垂直に近く立ち上がったのち、口縁部において外反するものと、直線的に外傾しながら立ち上がるものがあるようである。段構成のわかるものはないが、透かし孔の配置は段違い直交である。胴部片には多くヨコハケが認められ、すべての個体にヨコハケが施されていた可能性が高い。細片が多いが、静止痕の観察されるものは見受けられず、A種・Ca種ヨコハケと思われる。底部はタテハケののち、ナデ調整によって仕上げられるが、一部、ヨコハケの観察される資料もある。突帯は突出度が高く、面が貼り付け時のナデにより窪むものが多いが、断面M字状と表現する程ではない。江田船山古墳に比してハケの施し方や底部のナデなど、調整は丁寧に行われており、突帯突出度も高い。

最後に、周溝よりTK23~47型式の須恵器が出土している京塚古墳であるが、出土須恵器と埴輪の年代観には齟齬がある。京塚古墳の埴輪は器壁は薄手で、底部から口縁部までほぼ垂直に立ち上がり、口唇部付近で外反するものと、直線的にやや外傾しながら立ち上がるものがある。突帯3条4段構成で、円形透かし孔が2・3段目に段違い直交で配置される。突帯は突出度の高い断面台形状で、調整は1次調整タテハケを基調とするが、ヨコハケの認められる個体も存在する。胴部高は10~11cmで揃えられ、口縁部高もこれにほぼ等しい。調整の施し方や突帯突出度、突帯貼り付けなど、TK23段階の江田船山古墳、TK47段階の塚坊主古墳に先行するものであることは間違いなく、TK208~23段階の虚空蔵塚古墳のものに近い。突帯突出度は京塚古墳の方が高いが、他に虚空蔵塚古墳との差異は口縁部の屈曲において、虚空蔵塚古墳が口縁部全体が外反するのに対し、京塚古墳では口唇付近を屈曲させるに留まるといふ、プロポーションのわずかな違い位である。虚空蔵塚古墳との親疎から見て、TK208段階と捉えるのが最も妥当であろう。

以上、清原古墳群において、須恵器TK208型式からTK47型式段階までの埴輪の様相を確認した。次に、これら清原古墳群と八代海沿岸地域の埴輪との比較検討を行う。

(2) 八代海沿岸地域の埴輪

まず城南町琵琶塚古墳であるが、総じて器厚は薄手で、完形に近く復元された普通円筒は突帯4条5段構成と考えられる。底部から胴部にかけてはやや外傾しながら立ち上がるが、口縁部はほぼ直立する。他に胴部が直立し、口縁部がやや外反する個体もある。突帯は細身で異常に突出度の高い鏢状となっているものと、幅広で断面台形状のものがある。完形に近く復元された個体では、円形および三角形の透かし孔を2・3・4段目に3方向配置されており、他に朝顔形円筒の肩部にも円形、三角形の透かし孔が穿孔されている。外面調整は1次調整タテハケを基調とするが、不定方向で斜位に、断続的に施されたものもある。また、突帯の剥落した器面に、やや幅広の凹線による突帯設定技法の観察される資料がある。

当墳の埴輪については、筆者はかつて、外面に黒斑の認められることを重視し、川西編年Ⅲ期並行段階の埴輪として、集成編年5期に位置付けていた（竹中2003a）。しかし杉井健氏は、琵琶塚古墳出土資料を再検討した中で、埴輪については、黒斑の認められるものはごく少数であり、全体に良く焼きしまっているものが多いことから、川西編年Ⅳ期に位置付けられる可能性を指摘し、周溝内トレンチより埴輪と共伴した土師器、須恵器の年代観より、琵琶塚古墳をTK216型式期、集成編年7期前半に位置付けている（杉井2006a）。

琵琶塚古墳の埴輪は、形態的にも、先に見た清原古墳群の京塚古墳（TK208段階）に先行するものであることは間違いない。それ以上の詳細な時間的位置付けとして、焼成方法の別だけで判定を行うことは、現状では困難であろう。ただし今回、後述するカミノハナ1号墳や松橋前田遺跡（松橋大塚古墳）など、琵琶塚古墳と同じ県南地域の埴輪資料を再検討したことにより、製作技法、形態の両面においてこれら後出の埴輪と共通する部分が多々あり、時間的に近い関係にあると認識を改めた。カミノハナ1号墳、松橋前田遺跡に先行するものの、大きく隔たらない時期が考えられ、TK216段階とする杉井氏の位置付けは、妥当なものと考えられる。

カミノハナ1号墳の埴輪は総じて器壁は薄く、突帯は断面台形状で突出度が高い。普通円筒は突帯3条4段構成で、底部から口縁部まで、やや外傾気味に直線的に立ち上がる個体と、底部から口縁部まで垂直に立ち上がり、口縁端部を外反させる個体の二種が認められるが、両者において各段の高さ

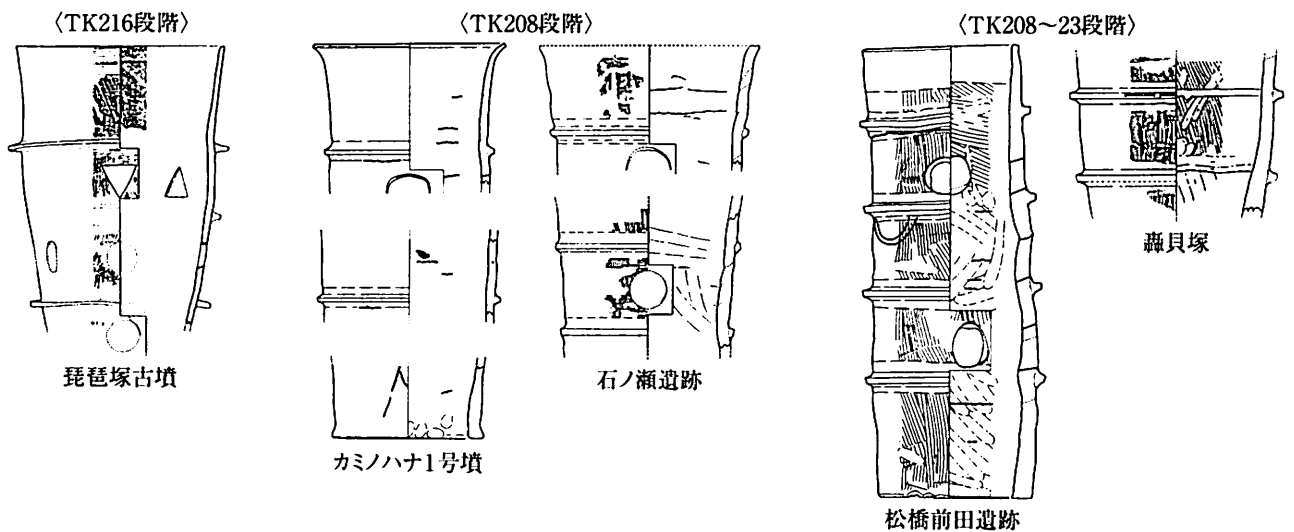


図3 八代海沿岸地域における窯窯焼成導入・展開期の埴輪 (Scale: 1/10)

は極めて厳密に揃えられている。透かし孔は円形のみで各段直交に配置され、外面調整はタテハケによる。TK208段階の清原古墳群京塚古墳と、二種のプロポーション、器厚、突帯突出度等、近似しており、並行段階のものと位置付けられる。

松橋大塚古墳は、現今まで資料の多くは公表されるに至っていないが、近在の松橋前田遺跡出土のものと同じ埴輪が供給されており、松橋前田遺跡の埴輪をもって松橋大塚古墳の様相を知ることができる。完形の普通円筒は突帯4条5段構成で、底部から口縁部まで垂直に立ち上がる。透かし孔は円形で2・3・4段目に段違い直交で配置されるが、朝顔形円筒においては円形以外に三角形の透かし孔もあり、肩部を含め、1段につき2方向だけでなく、1方向や3方向、4方向にも配置される。突帯は突出度の高い断面台形状で、中には極めて突出度が高く、鏢状になっているものもある。胴部各段は沈線による突帯設定技法により、高さ11cm前後に揃えられ、外面調整はタテハケによる。当墳の埴輪は、突帯突出度を見れば、清原古墳群京塚古墳と同程度であるが、器厚の肥厚化が進んでおり、これに後出する。また器厚の上では塚坊主古墳と同程度であるが、突帯貼り付けや調整等、製作の細部に至るまで、塚坊主古墳や江田船山古墳よりも丁寧に行われており、これらには先行するものと考えられる。TK208～23段階の虚空蔵塚古墳に並行する段階に位置付けるのが妥当であろう。

以上の古墳出土資料以外に、石ノ瀬遺跡、轟貝塚で、ともに破片ではあるが、埴輪の出土がある。石ノ瀬遺跡の埴輪は中・近世の堀遺構から出土したもので、帰属する古墳等、不明である。段構成、透かし孔の配置等、復原できるものはないが、底部から口縁部まで直立するものと、口縁端部を外反させるものがあるようである。透かし孔はいずれも円形で、小振りなものが目につく。突帯は突出度の高い断面台形状で、沈線による突帯貼り付け技法の施工が認められる。また外面調整としてBc種ヨコハケの施工が認められる。口縁端部の外反や、口縁部段と胴部各段の高さが同一であることなどの外見的特徴は、TK208段階の清原古墳群京塚古墳に類似する。また外面調整ヨコハケの採用や、突帯突出度なども京塚古墳に近似し、並行段階に位置付けて良いだろう。

轟貝塚出土資料も帰属する古墳等、不明である。資料も段構成や透かし孔の様相等が判明するものではないが、器厚は厚手で沈線による突帯設定技法を施す。外面一次調整タテハケのみのものと、二次調整ヨコハケを施すものがあり、前者は突出度の高い断面台形状の突帯や、目の粗いハケ目など、直線距離で5kmほどの位置にある松橋大塚古墳（松橋前田遺跡）の埴輪と酷似している。両者の間に直接的な関連性が想定され、松橋大塚古墳と同じくTK208～23段階に位置付けられる。

他に、道免古墳も同時期の埴輪を有しているが、詳細を検討できるほどの資料は得られていない。

### (3) 窖窯焼成導入・展開期の様相

以上に見てきた窖窯焼成導入・展開期における当地域の時間的変遷を整理すると、琵琶塚古墳（TK216段階）→カミノハナ1号墳・石ノ瀬遺跡（TK208段階）→松橋大塚古墳（松橋前田遺跡）・轟貝塚（TK208～23段階）となる。うち、琵琶塚古墳については、明確に窖窯焼成によるものかはやや判然としないが、後出のカミノハナ1号墳、松橋大塚古墳のものと、形態的、技法的に共通する部分が多々ある。特に琵琶塚古墳と松橋大塚古墳（松橋前田遺跡）との類似度は高く、普通円筒においては突帯4条5段構成で、底部から口縁部まで直立するプロポーションという普遍的なことから、円形以外に三角形の透かし孔の採用や透かし孔の各段多方向（3方向ないしそれ以上）配置、朝顔形円筒肩部への穿孔、突出度の高い鏢状の突帯など、普遍的には見られない特異な要素を、両者は共有する。また、朝顔形円筒二重口縁の第1口縁と第2口縁の接合において、第1口縁の口縁端部内面に、

短い沈線を不定方向に複数刻むことによって、その圧着を助長するという製作技法上の共通点も有しているが、この技法はカミノハナ1号墳の埴輪にも見られる。また、琵琶塚古墳、松橋大塚古墳ともに沈線ないし凹線による突帯設定技法が認められる。カミノハナ1号墳においては突帯の剥落した器面においても設定技法の施工は認められないが、にもかかわらず、底部から口縁部に至るまで、各段の高さが個体間で揃えられており、斉一性の高い埴輪を製作するという意識は共有されている。これら3者の共通点より、県南地域では、単に外見上の模倣とするだけでは説明のつかない、地域内での埴輪製作の継続性が考えられる。

一方、カミノハナ1号墳と並行する石ノ瀬遺跡の埴輪は、外面調整にB種ヨコハケを施し、透かし孔は円形に限られ、川西編年Ⅳ期の様相から逸脱した所のない、普遍的なものである。一見、特徴的な埴輪が多い当該期において、普遍的な石ノ瀬遺跡の埴輪は、むしろ奇異なものとして映る。ただし、個々に独白色の強い当地域に、点的に存在する石ノ瀬遺跡の存在こそ、地域の様相をよく示したものとも言える。琵琶塚古墳、カミノハナ1号墳、松橋大塚古墳の埴輪は、共通する要素はあっても、製作工人を一にするといったような、同工品的なものではない。外見上、技法上で共通する要素を持ちながらも、全体としては、それぞれの古墳に特徴的なものとなっており、継続される要素が個々に限定的なものであったと言える。即ち、それぞれの埴輪製作時に、地域内での継続的な要素や地域外からの影響を取捨選択して組み合わせることによって、それぞれの古墳に特徴的な埴輪を作り上げていたものと考えられる。

## 2 窖窯焼成最盛・終息期の埴輪

八代海沿岸地域で埴輪を有する後期古墳には、姫ノ城古墳、中ノ城古墳、端ノ城古墳、八代大塚古墳、国越古墳、塚原平古墳、東新城古墳、山下古墳が挙げられる。うち、姫ノ城古墳、中ノ城古墳、端ノ城古墳は、氷川流域の野津古墳群において累代的に築かれた大型前方後円墳で、それぞれ埴輪とともに須恵器を有しており、前章の清原古墳群と同じく、継続的で詳細な時間的位置付けが可能である。そこで本章では、まず野津古墳群の様相を確認し、これと比較することで、当地域の埴輪の位置付けを試みる。

### (1) 野津古墳群の埴輪

野津古墳群では主体部を含む全面的な調査が行われており、出土須恵器による上記3基の時間的位置付けは、姫ノ城古墳（MT15型式）→中ノ城古墳（TK10型式）→端ノ城古墳（TK10～TK43型式）となっている。これら3基の埴輪は、低平な断面M字状の突帯に、底部から口縁部にかけて大きく広がる所謂ラッパ形のプロポーションで斉一性が高く、同一系譜の製作集団の手によると思われる（竹中2003a）。うち中ノ城古墳の普通円筒には、口径90cm、全高98cmという巨大なものがあり、やや特異であるが、大きさ（及びこれに伴う段構成）以外に他2者との比較において逸脱した要素はなく、比較・検討に問題はない。

姫ノ城古墳、端ノ城古墳の普通円筒は、ともに突帯3条4段構成で（中ノ城古墳は5条6段構成）、円形透かし孔を2・3段目に段違い直交で配置する。外面調整は3者とも目の細かいタテハケにより、沈線による突帯設定技法が認められる。3者の時間的差異を表出する要素としては、前後する姫ノ城古墳と中ノ城古墳の間において突帯が更に低平化すること、中ノ城古墳と端ノ城古墳の間において外面調整タテハケに、断続的で不定方向の斜位のものが多くなることが挙げられ、さらに姫ノ城古墳、

中ノ城古墳、端ノ城古墳の順で、全体のプロポーシオンにおける外反度、外傾度が強くなる。3者の時間的異同は明確ではあるものの、その差異はわずかであり、MT15段階の姫ノ城古墳、TK10段階の中ノ城古墳という位置付けは妥当なものであろう。また、端ノ城古墳についても、中ノ城古墳との親疎から、MT85段階とするのが適当かと思われる。

(2) 八代海沿岸地域の埴輪

八代海沿岸地域の当該期における埴輪には、野津古墳群以外に国越古墳、八代大塚古墳、塚原平古墳、東新城古墳、山下古墳がある。これらについて、野津古墳群との親疎により、時間的位置付けを行う。

国越古墳の埴輪は全体に薄手で、断面台形状の細身の突帯を持つ。外面調整はタテハケで、7条もしくは8条/cmの目の細かな原体を用いているものが多い。未報告ながら、完形に近い普通円筒があり、その個体は突帯3条4段構成で、底部付近は垂直に近いが、上に行くに従い外反度を強め、ラッパ状に広がる。円形の透かし孔が3段目に対向位置で配置され、2段目は透かし孔が配置されていたであろう箇所が残存しておらず、3段目のみの一段配置か2・3段目における段違い直交配置かは明確ではない。沈線

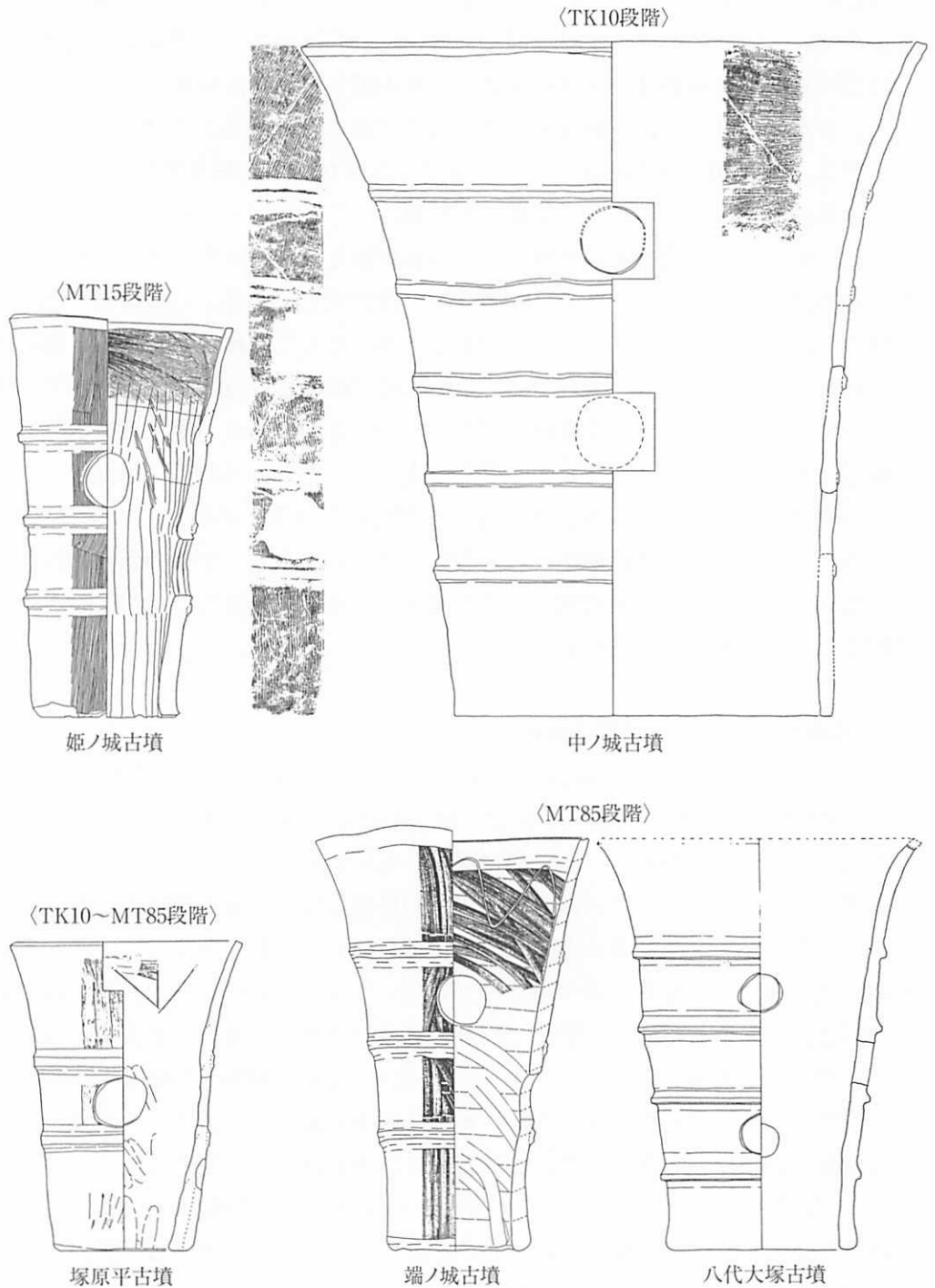


図4 八代海沿岸地域における窖窯焼成最盛・終息期の埴輪 (Scale : 1 / 10)

による突帯設定技法が認められ、また口縁部内面に線刻が施される。当墳の埴輪は、全形の外反度はTK10段階の中ノ城古墳と同程度であるが、突帯突出度はMT15段階の姫ノ城古墳に近く、両者の間、MT15～TK10段階と位置付けておきたい。なお当墳からはMT15型式の須恵器が出土しており、埴輪の時間的位置付けとの間に大きな齟齬はない。

塚原平古墳の普通円筒には、突帯2条3段構成のものとは3条4段構成のものがあり、透かし孔は3段構成のもので中央胴部段のみ、4段構成のもので段違い直交配置となっている。突帯2条3段の小型のものがあることを除けば、全形や突帯形状等、野津古墳群の埴輪と瓜二つで、口縁部内面に野津古墳群の埴輪に認められるものと同一意匠の「井」の字状や「∨」の線刻が施されていることから、野津古墳群と同一人の手による製品であることは間違いない。突帯突出度は中ノ城古墳、端ノ城古墳とほぼ同程度で、外面調整タテハケは端ノ城古墳と同じく断続的で不定方向の斜位のものが多い。ただし、全形における外傾、外反の度合いは端ノ城古墳ほど進んではおらず、やや先行すると思われることから、TK10～MT85段階に位置付けておきたい。なお当墳からはMT85型式からTK209型式までの須恵器が出土しており、埴輪の年代観は、これらにやや先行する。

八代大塚古墳の埴輪は総じて厚手で、外面調整として丁寧なナデを施し、器面を平滑に仕上げている。完形に近い普通円筒があり、突帯4条5段構成で、底部から直線的に外傾しながら立ち上がり、口縁上部において外反するラッパ状である。径に比して胴部各段が低く、横に大きな印象を与える。円形の透かし孔が2・3・4段目に段違い直交で配置される。突帯は細身でやや突出度のある断面台形状のものと、幅広で低平な断面M字状のもの2種がある。胴部高は8～13cmとばらつきが大きく、口縁部高も11～17cmと、個体によって差が大きい。全形の外傾度、外反度と、低平な断面M字状の突帯より、MT85段階の端ノ城古墳並行に位置付けられる。当墳からはTK10型式からTK217型式の須恵器、TK10～43型式段階の馬具飾金具が出土しており、埴輪の年代観はやや後出する。

当地域では、他に東新城古墳、山下古墳等があるが、現在までに得られている資料は細片のみで、詳細な時間的位置付けは不可能である。

### （3）窖窯焼成最盛・終息期の様相

以上を整理すると、姫ノ城古墳（MT15段階）→国越古墳（MT15～TK10段階）→中ノ城古墳（TK10段階）→塚原平古墳（TK10～MT85段階）→端ノ城古墳・八代大塚古墳（MT85段階）となる。その流れは漸移的で、短期間に凝縮されている。

筆者はかつて、後期段階の県南地域の円筒埴輪には、明確な地域色を見出せると述べたことがある（竹中2003a）。上記の6基から八代大塚古墳を除いた一群がそれで、その特徴は、底部から口縁部にかけて直線的に大きく開く逆台形状のプロポーションを持つことと、胴部段に比べて口縁部段と底部段が極端に高いことにある。胴部1段分の高さを1とした場合、各古墳それぞれにおいて口縁部：胴部：底部各段の割合が1.4～1.5：1：1.3～1.5となり、明瞭に口縁部と底部が高い。更に細かく見れば、調整には目の細かなハケを用い、線刻文様を内面に付することも共通する。特に野津古墳群の3基と塚原平古墳は、各段の高さ、径、器厚、突帯形状、透かし孔の大きさやバランスまでが近似しており、同じ製作集団の手によると見て間違いない。一方、国越古墳は、基本的な特徴は野津古墳群の埴輪と共通するが、径や突帯形状などの細部において異なっている。野津古墳群の埴輪と国越古墳の埴輪は、少なくとも同一の製作集団によるものとは見受けられないが、相互に強い影響のあったことは間違いなく、前章に見た当地域の様相と同じく、影響の受容側、発信側、あるいはその双方に伝播



する要素の取捨選択があったものと考えられる。

近年、小嶋篤氏が九州の後期段階の埴輪を系統的に検討した中で、八代大塚古墳を含めたこれらの一群に「肥後南部型」<sup>(1)</sup>の名称を与え、他地域への影響を指摘するとともに、その形成、展開を、野津古墳群を本願地とする豪族「火の君」の進出を絡めて論じている（小嶋2008）。特に、突帯設定技法の施工を特徴とする系統の中で「肥後南部型」の設定を行っていることは重要で、これらの一群が、外見的に類似するだけでなく、製作技法上の共通点も持ち合わせていることが明確になった。

ただし、八代大塚古墳は胴部高にばらつきがあり、口縁部高も胴部高より極端に高いものもあれば、ほぼ同じものもあり、突帯設定技法による斉一性の高い埴輪を製作するこの一群の中では、やや特異である。また底部高が胴部高を上回るものはなく、外面調整に丁寧なナデを用いる点も特徴的である。異なる要素を複数有する八代大塚古墳を含めて「肥後南部型」を設定するか否かについては、検討が必要であろう。ただし、逆錐形のプロポーションと伸長化した口縁部が共通することは、野津古墳群をはじめとする一群との間に影響があったことを示しており、国越古墳と同じく、受容要素の取捨選択があったものと考えられる。地理的には、球磨川下流域の八代大塚古墳と宇土半島基部地域の国越古墳は、野津古墳群と同程度の距離にあるが、影響の受容程度には大きな隔りがある。八代大塚古墳周辺には、他に長塚古墳や竹原古墳など、埴輪を有するとされている古墳があり、これら小地域での様相が明らかになれば、その受容程度の意味が見えてくるのかもしれない。

### 3 八代海沿岸地域における甕窯焼成埴輪生産

最後に、前章までに見てきた八代海沿岸地域における円筒埴輪の時系列を通時的に眺め、特筆すべきいくつかの事柄に触れたい。

当地域においては、甕窯焼成導入以前にも向野田古墳、有佐大塚古墳に円筒埴輪の採用が見られるが、ともに後続しない点的な採用に留まっていた。埴輪生産がやや本格化するのにはTK216段階の琵琶塚古墳からで、当墳の多方向に透かし孔を有する特異な埴輪は、TK208～23段階の松橋大塚古墳にも影響を与えており、埴輪製作が地域に定着した証左と言える。

TK208型式並行段階には、突如として石ノ瀬遺跡にB種ヨコハケを施し、地域の変容の要素が見られない埴輪が登場する。県北地域に目を転じると、石ノ瀬遺跡と同じくTK208段階に菊池川下流域の京塚古墳と、菊池川中流域の高熊古墳で、石ノ瀬遺跡と同じくヨコハケを施した川西編年Ⅳ期の普遍的な埴輪が登場する。この普遍的な埴輪の受容姿勢に関しては、地域によって違いがあり、八代海沿岸地域、菊池川中流域では、それぞれ石ノ瀬遺跡、高熊古墳の製作を引き継いだと思しき埴輪は登場せず、点的な受容に留まるのに対し、菊池川下流域の清原古墳群では、京塚古墳を契機として累代的な埴輪生産が開始され、また首長系譜を異にする伝佐山古墳、稲荷山古墳にもB種ヨコハケを持った埴輪が登場し、地域内での拡散が確認できる。両者のこの相違については、菊池川下流域では、京塚古墳以降も継続する首長墓が累代的に続き、一方の合志川流域では高熊古墳に継続する首長墓が見出し難いという、首長系譜の継続性そのものに起因するかと思われる。普遍的な埴輪が初現となった菊池川下流域では、その製作を受容した首長系譜がそれを堅持し続け、地域内の別の首長系譜へも影響を与えたと考えられる。また、八代海沿岸地域では石ノ瀬遺跡の前段階である琵琶塚古墳から地域内における埴輪生産が既に開始されており、受容側が普遍的な埴輪という、新しい製作技術を特に必要としていなかったとも考えられる。ただしTK208段階におけるこのB種ヨコハケ埴輪の複数地域への導入は、当該段階に情報の伝播が盛んであったことを示しており、八代海沿岸地域では、石ノ

	緑川流域	宇土半島基部 地域北部	宇土半島基部 地域東部	宇土半島基部 地域南部	氷川流域	球磨川流域	天草地域
T K 216段階	琵琶塚						
T K 208段階		石の瀬遺跡 轟貝塚	松橋大塚				カミノハナ1号
T K 23段階							
T K 47段階							
M T 15段階					姫ノ城		
T K 10段階				国越	中ノ城		
M T 85段階				塚原平	端ノ城	八代大塚	

図5 八代海沿岸地域における窖窯焼成埴輪の併行関係

瀬遺跡に並行して、天草という島嶼部にもカミノハナ1号墳が登場する。カミノハナ1号墳は天草地域における唯一の埴輪であるが、この点的な分布も、技術伝播が盛んであったこの段階の様相を示すものであろう。天草地域では後続する埴輪製作は行われず、その点的な入り方は、宇土半島基部地域に後続する埴輪製作のない石ノ瀬遺跡と同じとも捉えられ、埴輪という新しい祭式そのものの取捨選択という受容側の意志が働いたものかと思われる。

T K 208～23段階の松橋大塚古墳、轟貝塚をもって当地域での埴輪生産は一旦終了し、M T 15段階の姫ノ城古墳まで、大きな空白期が存在する。集成編年8期に相当するこの空白期は、八代海沿岸地域における首長系譜の空白期にもあたり、江田船山古墳や稲荷山古墳の菊池川下流域や、三の宮古墳の関川流域など、埴輪生産が盛んに行われる並行段階の県北地域と好対照を成している。

集成編年8期の空白期を経て、八代海沿岸地域には斉一性の高い一群が登場する。この一群はM T 15段階の姫ノ城古墳を初現として、墳長102mの大型前方後円墳である中ノ城古墳をはじめとする氷川流域の野津古墳群において累代的に生産が行われるのみならず、宇土半島基部地域の塚原平古墳にも同工品が供給されている。T K 10～M T 85段階に位置付けられる塚原平古墳は、T K 10段階の中ノ城古墳にわずかに後出するが、全高、径ともに1 mに近い超大型品を持つ中ノ城古墳とほぼ時を同じくして、突帯2条3段構成の小型品が首長系譜を異にする小円墳に供給されたことは、非常に興味深い。イレギュラーな大型品が、卓越した大型前方後円墳である中ノ城古墳と八女古墳群の岩戸山古墳に採用されていることは、階層の表出である可能性があり、埴輪にそのような意味を持たせること自体、九州では稀なケースであることを以前に述べたことがあったが（竹中2003b）、その大型円筒と同じ製作者の手による小型円筒が、径13.5mの小円墳である塚原平古墳に採用されたこともまた、消極的な意味での階層の表出であったと言えるかもしれない。

この後期段階における八代海沿岸地域の斉一性の高い一群は、姫ノ城古墳を初現とし、中ノ城古墳を上位とする階層性の表出を行っていることから、野津古墳群の存在を軸とした、「野津古墳群の埴輪」とも表現できよう。同一首長系譜と考えられる宇土半島基部の国越古墳と塚原平古墳では、国越古墳が基本的な要素に影響を見出せるものの、細部においては「野津古墳群の埴輪」と異なるのに対し、後出する塚原平古墳は「野津古墳群の埴輪」そのものを採用している。この差異は、そのまま野津古墳群を奥津城とする首長系譜の、周辺地域への影響度合いの推移と読み取れるかもしれない。

集成編年8期の空白を挟み、当地域の埴輪生産は、その性格を大きく異にしている。空白期以前においては、地域における埴輪生産が成立しても、それぞれにおいて情報の取捨選択を行い、各古墳個々に特徴的な埴輪を製作していたが、空白期を経て斉一性の高い一群が成立し、首長系譜を越えた、同工品の供給も行われている。この変質は、埴輪生産とその製作集団を管理し、時に他首長墓への影響も表出できた強大な首長系譜の登場に起因すると思われる。

## おわりに

以上に、八代海沿岸地域における窖窯焼成導入後の円筒埴輪の変遷を見てきたわけであるが、古墳群の埴輪を軸に、その対比から時間的位置付けを行うことで、個々の埴輪の並行関係、前後関係が詳細に浮き彫りとなった。しかし、地域を異にする埴輪から得た時間的位置付けのため、誤差が生じている危険性はある。当該地域の古墳編年を考える上で、ひとつの叩き台にはなろうかと考えているが、古墳総体として見た場合に生じるであろう齟齬について、先学諸兄の御批判を仰ぎたい。

## 注

1) 小嶋篤氏は「(突帯設定技法を用い、) 底部高と突帯間隔が同じ」Ⅳ群系A類の亜流として「肥後南部型」を設定し、「(突帯設定技法を用い、) 底部高が突帯間隔よりも大幅に高い」Ⅳ群系B類とは区別している。しかし筆者は、県南地域にまとまる一群の特徴は、底部高と口縁部高が胴部高(突帯間隔)に比して高いことにあると考えており、氏のⅣ群系A類の中での位置付けにはやや疑問を感じている。「肥後南部型」に八代大塚古墳を含めること、及びⅣ群系B類に含まれる嘉穂型と本型式との差異を勘案しての設定と思われるが、「肥後南部型」の設定には、氏が同系統とするⅣ群系A類との関係性や、Ⅳ群系B類との違いを明確にする必要があると考える。

## 引用・参考文献

- 井上義也 2007「九州における古墳時代中期の埴輪」『九州島における中期古墳の再検討』第10回九州前方後円墳研究会発表要旨・資料集 九州前方後円墳研究会：pp. 75-106
- 宇土市史編纂委員会編 2005『新宇土市史』資料編 第二巻 考古資料・金石文・建造物・民俗 宇土市
- 上田 睦 2003「古墳時代中期における円筒埴輪の研究動向と編年」『埴輪論叢』第5号 埴輪検討会：pp. 1-32
- 小浜 成 2003「円筒埴輪の観察視点と編年方法 - 畿内円筒埴輪編年の提示に向けて -」『埴輪論叢』第4号 埴輪検討会：pp. 1-9
- 加藤一郎 2008「九州南部における埴輪の伝播と受容 - 唐仁大塚古墳表採資料の紹介をかねて -」『大隅申良 岡崎古墳群の研究』鹿児島大学総合研究博物館研究報告No.3 鹿児島大学総合研究博物館：pp. 233-242
- 河内一浩 2003「古墳時代後期における円筒形埴輪の研究動向と編年」『埴輪論叢』第4号 埴輪検討会：pp. 39-59
- 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会：pp. 1-70
- 木村龍生 2007a「中九州における中期古墳の編年」『九州島における中期古墳の再検討』第10回九州前方後円墳研究会発表要旨・資料集 九州前方後円墳研究会：pp. 161-181
- 木村龍生 2007b「第二章第二編 特節 須恵器 - 時期・産地比定 -」『菊水町史 江田船山古墳編』和水町：pp. 178-184
- 木村龍生 2008「九州の古墳時代須恵器と古墳の年代について」『後期古墳の再検討』第11回九州前方後円墳研究会発表要旨・資料集 九州前方後円墳研究会：pp. 79-93
- 九州前方後円墳研究会 2000「九州の埴輪 その変遷と地域性」第3回九州前方後円墳研究会発表要旨・資料集
- 九州前方後円墳研究会 2007「九州島における中期古墳の再検討」第10回九州前方後円墳研究会宮崎大会発表要旨・資料集
- 九州前方後円墳研究会 2008「後期古墳の再検討」第11回九州前方後円墳研究会佐賀大会発表要旨・資料集

- 小嶋 篤 2008「九州古墳時代後期の埴輪生産」『後期古墳の再検討』第11回九州前方後円墳研究会発表要旨・資料集 九州前方後円墳研究会：pp. 149-169
- 杉井 健 2004「熊本県地域における古墳時代中・後期の首長墓系譜変動にかんする覚書」『西日本における前方後円墳消滅過程の比較研究』大阪大学大学院文学研究科：pp. 3-26
- 杉井 健 2006 a 「琵琶塚古墳再考」『文学部論叢』89 熊本大学文学部：pp. 1-27
- 杉井 健 2006 b 「熊本大学所蔵の熊本県宇土市轟貝塚出土円筒埴輪」『埴輪研究会誌』第10号 埴輪研究会：pp. 145-150
- 高木恭二 2008「石棺から見た古墳時代の九州」『火の君、海を征く！～古墳からみたヤマトと八代～』平成20年度秋季特別展覧会 八代の歴史と文化18図録 八代市立博物館未来の森ミュージアム：pp. 126-141
- 竹田宏二 2000「熊本県の埴輪」『九州の埴輪 その変遷と地域性』第3回九州前方後円墳研究会発表要旨・資料集 九州前方後円墳研究会：pp. 437-442
- 竹中克繁 2003 a 「円筒埴輪の地域性－熊本県地域の埴輪－」『先史学・考古学論究』Ⅳ 龍田考古学会：pp. 85-100
- 竹中克繁 2003 b 「九州における埴輪生産の導入と展開」『埴輪－円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析－』第52回埋蔵文化財研究会発表要旨・資料集 埋蔵文化財研究会：pp. 235-254
- 竹中克繁 2008「王陵系埴輪【地域受容】の一類型－古墳時代中期における南九州の埴輪生産－」『古代文化』59-4（財）古代学協会：pp. 94-103
- 藤本貴仁 2008「中九州（肥後地域）の後期古墳」『後期古墳の再検討』第11回九州前方後円墳研究会発表要旨・資料集 九州前方後円墳研究会：pp. 197-216

#### 挿図出典

- 図2：京塚古墳（桑原憲彰編 1987『京塚古墳』熊本県文化財調査報告第86集 熊本県教育委員会）  
虚空蔵塚古墳（緒方勉編 1982『清原古墳群及び岩原古墳群の周溝確認調査』熊本県文化財調査報告第55集 熊本県文化財保護協会）  
江田船山古墳（桑原憲彰他編 1986『江田船山古墳』熊本県文化財調査報告第83集 熊本県教育委員会）  
塚坊主古墳（山城敏昭編 1997『塚坊主古墳』熊本県文化財調査報告第161集 熊本県教育委員会）
- 図3：琵琶塚古墳（豊崎晃一・清田純一編 1986『塚原古墳群発掘調査報告書』城南町教育委員会）  
カミノハナ1号墳（本書）  
石ノ瀬遺跡（宇土市史編纂委員会編 2005『新宇土市史』資料編第2巻 宇土市）  
松橋前田遺跡（本書）  
轟貝塚（宇土市史編纂委員会編 2005『新宇土市史』資料編第2巻 宇土市）
- 図4：姫ノ城古墳（甲元眞之他編 1994『野津古墳群』熊本県竜北町）  
中ノ城古墳（今田治代編 1999『野津古墳群Ⅱ』竜北町文化財調査報告書第1集 熊本県竜北町教育委員会）  
塚原平古墳（谷口義介・高木恭二編 1999『塚原平古墳』熊本県不知火町教育委員会）  
端ノ城古墳（甲元眞之他編 1994『野津古墳群』熊本県竜北町）  
八代大塚古墳（東光彦・乙益重隆編 1987『八代大塚古墳』八代市文化財調査報告書第1集 八代市教育委員会）